

AN ENGLISH
AND AMERICAN
LITERARY
CALENDAR
spring

英語歳時記／春

KENKYUSHA

英語歳時記／春

AN ENGLISH AND AMERICAN LITERARY CALENDAR spring

監 修

土居 光知

福原麟太郎

山本 健吉

編 集

成田 成寿

研 究 社

資料提供
英国大使館広報課
英国旅行協会
NHK
学習研究社
角川書店
キーストン
共同フォトサービス
齋藤襄治
デュボン社
羽田栄治
B. O. A. C.
米国大使館広報課

米国商務省観光局
諸岡和房

図・さし絵
大川アート
佐藤広喜
玉木図版社
藪内正幸
山下史人

箱・表紙装幀
増澤聖司



KENKYUSHA

〈検印省略〉

英語歳時記／春

1968年6月20日 初版発行
1968年7月20日 初版第2刷発行
1977年8月10日 9版発行

編者 成田成寿

発行者 山本友一

発行所 研究社出版株式会社

〒162

東京都新宿区神楽坂1の2

電話 東京(269) 4521(代)

振替口座 東京7-83761 番

印刷 研究社印刷

美術印刷 大平舎

写真製版 学術写真製版所

製本 新栄社製本

製函 加藤製函所

落丁・乱丁はお取りかえします

1390-180001-1860

は じ め に

日本にはむかしから歳時記の類がある。また俳句歳時記のような形で、自然と生活とを季節の推移に結びつけ、そのあらわれを文学作品に見たものも多い。イギリス、アメリカ文学でも花鳥風月に対する言及が多く、生活と結びついた行事がある。イギリス、アメリカ文学について歳時記的なものができないかと考えたのが本書の発想であった。

イギリス、アメリカ文学、特に詩歌には、たしかに自然がよくあらわれているし、季節の推移も見られる。四季の推移などについて書いた本はある。だが、日本の歳時記の趣向のような書物は、まったく存在しない。その点、類書もなく、本書の編集はひじょうな困難を経験した。採り上げる項目の選定から、まったく新しく、ほとんど何もないところから出発した。監修の諸先生や執筆をお願いした諸家のご苦勞も、並みたいいものでなかったが、おかげで、イギリス、アメリカ文学に関する一種の歳時記的なものが生まれた。英米にも類を見ない、まったく新しい分野の開拓になったと思う。

このようにして、まがりなりにもようやく、形ができたが、そのために明らかになったこともすくなくない。日本の歳時記のように、ほとんど日々が俳句などの題材になっていることはないし、また季節や行事あるいはそれに対する態度にも異同のあることは、引用されている詩歌、散文で明らかになるであろう。また、多くの作家には多少とも歳時記的な言及があるものであるが、特に、鳥や花などについては英米ともにロマン派、あるいはその傾向をもつ人々、その中でも、ある一群の人たちに多く見られる。つまり、ある種の偏向があるということになる。ほかの時代の作家、作品についても検討がなされたが、結果としては、そのようなものが出てきたのである。むろん各時代の特色を見ようとすれば別であるが、歳時記的に通時的に見て、このような結果になったのである。気候風土の違う日本と、英米の差はいうまでもないが、イギリスとアメリカでも、かなりの差のあることがみとめられるのは当然であろう。イギリスでも地方で多少の差はあるが、広大なアメリカの場合には北と南、あるいは西と東では事情がひじょうに違う。イギリスのほかに、アメリカは特に北部と南部に分けて、はじめに現地の経験をお持ちのかたにご執筆をご依頼したもの、そういう意味からであった。アメリカ特有の行事、動物、植物もすくなくない。ナイティンゲールなどイギリスの詩歌に多い小鳥が、アメリカでは見られないということなども明らかになっている。

本書に選んだ項目は「春」、「夏」、「秋」、「冬」、それに「雑」に大別し、それぞれの部分の代表的ともいわれうるようなものに、なるべく限定した。それにしても、すでに本巻の春の定義からして、イギリスが2, 3, 4月で、アメリカが3, 4, 5月と、期間のずれが見られるなど、かなり無理なところがないでもない。そのようなところからも項目

として載せるべきもので、洩れているものも多いが、できるだけ詩歌などにあらわれているものにかぎったために入っていないものもある。将来、また、いろいろの増補訂正をこころみるつもりである。なお本書の内容についてはつぎのような方針を採った。

1. 項目は、時候、天文、地理、生活、行事、動物、植物の7部に分けた。
1. 本巻に収録した項目の総数は 369, 時候 24, 天文 28, 地理 15, 行事 33, 生活 26, 動物 81, 植物 162.
1. 項目のつづりはできるだけ英米の現行の辞書に従い、発音やアクセントについても、日本で慣れている音標文字にしたがったが、その根拠として英米の辞書、発音辞典などを参照した。
1. 邦訳名についてはできるだけ日本で受入れられているもので表記した。
1. 動物、植物の、項目での邦訳名は原語読みの場合を除き、ひらがなで表わし、解説、引用文邦訳ではすべてカタカナにした。
1. 引用はすべて原文とし、かならず訳文を添えた。
1. 引用原文の出典について、単行本および雑誌の場合はイタリック体に、作品集の中の1篇もしくはその1部を表題とする場合は引用符でくくった。
1. 各項目の解説の末尾にある [] の姓は、それぞれ執筆者名を表わす。
1. なお、同一詩句などが、各執筆者によって、くりかえし引用されている場合がある。また、その原文の典拠によって多少つづりの差があることもあるし、訳文に差のあることもあるが、諸家のご意見を尊重した。

本書は、むろん事典的な要素を持つことも当然である。しかし、同時に、読みものとして、面白く、また、どこを読んでも興味あるものとなっていると信じている。

最後に、本書が出版されるにいたるまでには監修の土居光知、福原麟太郎、山本健吉の三先生の方ならぬご苦勞をいただいた。まず、方針の確立から項目や執筆者の選定をしていただき、さらに執筆に加っていただき、校正の段階でもいろいろご注意を賜わった。特に山本先生には日本との季節感の相違などの点についてご指示をいただいた。また、執筆の諸先生の ひじょうなご好意あるご協力をえたことに対しても深謝したい。同時に本書の編集に当っては、項目や図版などの選定その他の実際の想像もできない困難は、出版部の平国勝朗、定松正の両氏が献身的に努力して、ようやく形ができた。むろん本書の性質上、印刷所にもなみなみならぬ迷惑をかけたものである。なお、ほかにもいろいろなかたがたのご助力をえている。これら多くの人々に対して感謝をし、なお、今後、本書がいっそうよくなり、世界で独自のものとして、その価値を発揮できることを祈っている。

1968 年 5 月

編 者

春の季節

イギリスの春

福原麟太郎

イギリスにいたのも、もう遠い昔になった。その頃の春の思い出を求められても、雲のように、とぎれとぎれにしか、心に浮んでこない。

春の盛りというのは、5月なので、ちょうど、わが国でいうと北海道あたりと同じなのであろうか、色々の花が同時に咲くというのも似ている。然し、春はやはり3月の末から4月へかけてやってくる。

寒さが去ったなと思うころから、何だか空の色もあかるくなって、日射しも一陽來復という心持である。冬の間は、太陽が低くて、地平線に近く短い弧を画いて、たちまち没していった。朝が明けるのもおそく、9時になってもまだほの暗かったし、午後の4時頃になると、もう夕暮という空合であった。それも太陽の見える日は少く、多くの冬の日には、どこに太陽がいるか判らない。目を上げてさがすと、どんより曇った空のどこかに、黄色くほんのりと明るいところがあって、ああ、あそこだろうというようなことであった。それが、4月ともなれば、位置も高くなり、光も輝いてくる。季節の代り目ということを深く感じさせたものだ。

春が近づいたことを最も強く感じさせるものは、路傍の街路樹や、生け垣であった。私はロンドン郊外の住宅地に住んで毎日市内の図書館へ通っていたため、広い野原や森を見ることは稀で、毎日眺めている自然は、街路樹や生け垣や、その生け垣の中にある、住宅の前庭の芝生だの植込だのであった。

その街路樹や生け垣が、春が近づくとともに何となく色めいてくるのである。スズカケの、葉の落ちつくした裸の幹が、高さをそろえて兵隊のように歩道の縁にならんで立っているのだが、その膚が、一様に、何だか、少し青みを増している。段々あたたかくなってくると、もうまるで、樹液がその下にほとぼしり上っているかと思われるほどの張りを見せてくる。芽も吹き出しそうだ。歩道をはさんで低くつらなっている生け垣は、サンザシなどが多いのだが、これも葉は全くなく、針金のように曲りくねった小枝が、どことなく生氣を帯びて来て、かがんでよく見ると、もう小さな小さな青芽が、その黒い小枝のあらゆるところに吹き出しているのだ。おお春よ、春よ、と思わず声を立

てそうにうれしくなる。

もっと春が近づくと、夜など、むっとした空気が戸外にあって、もう外套もやや重いように感じられる。

私はある早春、ハロウ学校を見に行ったことがあった。

ハロウ学校はイートン学校と並んで、英国の有名な高等中学校である。ロンドンの郊外、バスで30分ほどの所にあり、丘の上に立っている。私たちは、バスの窓から、ひろびろとした牧場や草地、村落などを眺めながら、もう十分春のきたことを知った。アズの木が方々に2,3本づつ立って花をつけているのが、丁度、わが国でいえば、桜の立木のように、花の色も、薄紅もしくは白く、春霞たなびきにけりという風情であった。そこいらの田舎を歩き廻りながら、ふと墓地の中へはいってしまったりなどした。すると、きれいに掃除された墓のふところに、土を入れて花床を作ったのもあった。ひとつの花床ではスノウドロップが、耳輪の珠のように美しく群れて咲いていた。黄水仙やクロカスガ、無難作に道ばたに花をひらいているのが見られた。ハロウの町へ入ると、襟につける花を売っている者もあった。

私はそういう春の来たことを知った1日のこと、勉強を休んで、思う存分、諸方を散歩してみようと思った。

私は、いつも乗る何番かのバスを待たないで、ハイド・パークの方へゆくのによじ登った。というのは、バスはみな2階つきなのだ。ハイド・パーク行きの2階には屋根がなかった。あたたかい日の光を浴びながら、風をきって3,40分も揺られ、早春の空気を呼吸すれば、どんなにか良い気持ちであろう、と思ったからである。私の計画は成功した。私が、殆ど人の乗っていない2階の席へ腰をおろすと、曲りくねった鉄梯子を、かけるように上って来たのは、いかにも人のよさそうな大男の車掌であった。「サンキュー」と尻上りに私に呼びかけて私のかたわらに立ち、切符を切りながら、彼も、楽しそうに口笛を吹いていた。

私は春めいている町の景色が、どんどん飛んで来るのを迎えながら、今日のよろこびを、ハルガキタ、ハルガキタと胸の中でくりかえしていた。私は紺のセビロを着ていた。この紺は、冬の間じゅう黒い色だとしか思えなかったのが、いま見ると、まさしく、花やかに紺である。その位、日の光があかるく私の身体を包んでいるのだ。

私はうれしくなって、通りすぎる町通りを尚も見ていると、15,6世紀あたりの建築と思われる教会堂の枯れた灰色の壁にも、何かしら、うるおいが出ているように思われ、境内の芝生の緑も、もえ立つように生き生きとして生命が感じられた。又、路を歩いている女の人の姿も、春めいて派手で、活潑にバイヴメントを蹴ってゆく靴のかかとも、冬を追いのけた誇があるかのように思えた。

その1日はハイド・パークからグリーン・パークと、地続きの公園を、ひとりぶらぶら歩いて、日光と緑とを満喫して帰った。何だか新しい希望が胸にわいて来て、これか

ら進めてゆく研究のことなども、改めて、計画をし、紙の上へ書いてみたりした。

朝、目がさめた時なども、春を感じた。そしてそれは、たしかにイギリスの春の朝であった。ねているところは2階の寝室で、もう起きる頃かしらと思ひながら、まだ目をあけないでいると、さっき眠っている時から耳についていた音が、だんだんはっきりしてきて、鳥の轉る声なのだということが解った。実際、私はその轉りの余りに喧ましいのに目をさましたのであった。喧ましいと形容したいほど、小鳥どもは、私の窓の外で、べちゃくちゃと何かしら歌い、語りあっているのである。

何の鳥だろうと、私はその声によって、種類を判別してみようとするがなかなか解らない。彼らは巣をつくっているのだ。恐らく窓に近く立っている林檎の樹に群がって、巣をつくる喜びをしゃべり合っているのだ。雀もいる。クロツグミもムクドリをいらしめる。目をあいてみると、カーテンをひいてある寝室の中はまだ仄暗い。おそらく、戸外もまだ十分明けてはいまい。春のいとなみだ。自然の希望の表現だ。それにしても、このように鳥の声で目がさめるということは、東京ではなかったことだ。鳥を可愛がる国、イギリスへ来ているという事を、あらためて意識した。

4月の中頃のことであったろうか、オックスフォードとケイムブリッジのボートレースがあったのを見に行ったのも、今はなつかしい思い出である。

その日はあまり春らしい天気ではなかった。すこし雨模様であった。然し私には千載一遇のような気がして、乗車券付観覧券を何日前に買って置いたものだ。汽車に運ばれて、テムズのすこし上流の方へ溯り、或る鉄橋の上へぞろぞろ歩いて行って、そこから見るのであった。

そこへ行ってみると、兩岸は黒山のような人だかりで、要処々々には棧敷もこしらえてあり、屋根の上にも人が群がっている。私どもは、川の真中で、その鉄橋の下をくぐってくるのを見物するというしかけであった。

その日は、汐の加減で、川下から川上へと漕いで上るのであったが、時間になっても、なかなかやって来ない。と思っていたとき、俄かに兩岸の群集が、ざわめき出した。そして、何だか叫んでいると思ったら、みな「ケイムブリッジ、ケイムブリッジ」と呼んでいる。ケイムブリッジの方がさきに出ているらしい。

私どもは欄干につかまって、下の方を一心にみつめていると、すぐ目の下を、さっと、尖った艇首が、艶々しく白く光って迂り出たと思うともう通りすぎた。その舳にひらめいていたのは、たしかに Light blue の旗、いかにもケイムブリッジだ、と思うまもなく、その左手に、これも、まっ白く光って、もひとつの艇首が、さあっと現われて、また直ぐ、行ってしまった。これはオックスフォードだ。渾身の力を出して漕いでいるクルウたちの列んだ顔と、むかでの、オールの美しい運動、それらが、雁行して、もう、遠い向うの川上へ去ってしまった。「ほんの瞬間であった。然し私は、まざまざと、目近かに相争う二つの歴史が、輝く新艇に乗って通り過ぎるのを見た。あのボート

の色を私は忘れないであらうと思う」と私は手帳に書いているが、実際にいまも、あの一瞬の心のときめきは、あきらかに思い出される。

春は5月まで続く。私は、そのあくる年の3,4月はヨーロッパ大陸で過した。私は、いつイギリスを出たのであったらうか。アムステルダムを最後に、オランダの港から船へ乗って、一晩ねて、テムズ河口にあるグレイヴゼンドという港へついたときは、ああ帰ったと思った。5月のある朝であった。そして、汽車に乗って、ロンドンに向う午前、私は飽かず、窓の外に眺め入っていた。

それは甍々たる緑の牧場、緑の野原のつながりである。青々とそれは続いている。森、村、池、それが、緑に埋もれている。その緑の中に、あらゆる果樹が紅紫の花をつけ、草地を仕切っている生け垣にはサンザシの花が白く砂糖をこぼしたように、あらゆるところに咲きみだれている。イギリスは国中が春の装いをしているのだ。私は躍る心を抑えかねて、ああ帰った、帰ったと、ひとりで胸をたたいていた。

ニュー・イングランドの春

刈 田 元 司

春はアメリカでも冬と夏のあいだにはさまれた季節で、March, April, May の3カ月をいう。ニュー・イングランドは、Captain John Smith が Maine 州沖に豊富な漁場を発見して彼の1616年の地図上にあたえた名称がはじまりで、現在の北東部の6州すなわち Maine, New Hampshire, Vermont, Massachusetts, Rhode Island, Connecticut をいう。北緯41度から47度、東経67度から73度にわたる広大な土地で、総面積66,608平方マイル、陸地面積63,206平方マイルである。当然いろいろな相違はあるであろうが、共通しているのは寒暑の差のはげしい気候と、岩石の多い土地と、天然資源の不足で、そのため植民も1620年までおこなわれなかった。Henry Adams は、冬は生きようとする努力 (the effort to live)、夏は熱帯的な放縱 (tropical licence) で、互いに敵対するはげしい季節であるといっているが、春は、したがって、その両極端にはさまれた、あかるい、なごやかな、birth と innocence と joy の時期であり、暗闇を追い払う光の時期でもある。

2月末から3月初めに南や南東からながれてくる潮を 'Snow eater' とニュー・イングランドの人たちはいう。その潮によって生じる大洋からのあたたかい風のために、深くつもっていた雪もとけ、霧が発生し、ときにはぬか雨がふつて、雪どけのために道がぬかるんだり、小川の水がはんらんしたりする。そして地面にかすかな緑色の苔が浮きあがって見えるようになる。冬が長く、人びとの自由をくらく奪っていただけに、春をむかえるよろこびは大きい。Henry David Thoreau はその心浮きたつよろこびのさま

を *Walden* の春の章にしるしているが、*Journal* にはさらにゆたかな描写がある。

This is the first really spring day. . . . The sound of distant crows and cocks is full of spring. . . . Something analogous to the thawing of the ice seems to have taken place in the air. At the end of winter there is a season in which we are daily expecting spring, and finally a day when it arrives. . . . Methinks the first obvious evidence of spring is the pushing out of the swamp willow catkins. . . . then the pushing up of skunk-cabbages spathes (and pads at the bottom of water). —March 10, 1853

今日こそ最初の本当の春の日。遠くのカラスやヤマシギの啼き声にも春がいっぱい。．．．氷の解ける状態に似たものが空中にも起ったらしい。冬の終りにはわれわれが毎日春を待ちのぞむ季節があり、ついにそれが到達する日がある。．．．思うに、春の最初の明らかな証拠は、沼地のヤナギの尾花がつきでることであり、それからザゼンソウの仏炎包と（水底にスイレンの葉が）つきでることである。

アメリカ最初の詩人 Anne Bradstreet は、春をつぎのようにうたった。

With smiling face and garments some- what green,	顔に笑みをうかべ薄緑の衣を着て
She trimmed her locks, which late had frosted been,	彼女はいままで凍っていた髪をととのえた、
Nor hot nor cold she spake, but with a breath	暑くも寒くもなく彼女は口をきいたが
Fit to revive the numbed earth from death.	その息吹きは こごえた大地を 死からよみがえ らすにじゅうぶんだった。

—‘The Four Seasons of the Year’,
10-13

春とはいっても、その歩む足どりは遅々として風はまだつめたい。Longfellow の ‘Spring’ や Whittier の ‘April’ の詩でうたわれているように、風にゆれるニレやメイプルの木梢に小鳥の声もきこえないし、牧場はまだ白一色の雪で、クロウカスやスミレの咲きだすべきところにも吹きだまりが残っている有様である。だから Thoreau が つぎのようにいうのも当然であろう。

Still cold and blustering. . . . How silent are the footsteps of spring! There, too, where there is a fraction of the meadow, too rods over, quite bare, under the bank, in this warm recess at the head of the meadow, though the rest of the meadow is covered with snow a foot or more in depth, I am surprised to see the skunk-cabbage, with its great spear-heads open and ready to blossom. . . . The spring advances in spite of snow and ice, and cold even.

—*Journal*, March 30, 1856

まだ風は寒く吹き荒れている。．．．春の足音の何とずかなことよ！ 牧場の他の場所はまだ 1 フィート以上の雪におおわれているのに、牧場の上(空)のこのひっこんだ暖かいところの 2 ロッド向うの堤防の下は、牧場の一部が地肌を見せているが、ここではザゼンソウが大きな槍のような穂をひらいて今にも花を咲かせようとしているのを見てびっくりする。．．．春は雪や氷や寒さにもかかわらず近づいてくる。

太陽の日射しはあたたかくとも、風はまだつめたい早春のことを、ニュー・イングランドの詩人といわれる Robert Frost は ‘Two Tramps in Mud’ の中でうたい、‘Prayer in Spring’ では春にたいする祈りをこめている。彼の詩の中で最も有名なのは、氷河時代の名ごりで敷地内にごろごろころがっている石をあつめて隣りの地面との境の石垣にしていたのが、冬のあいだにまたころげ落ちて用をなさなくなっているのを、春の 1 日、隣りの人としめしあわせて修理する様をうたった ‘Mending Wall’ である。

Emily Dickinson もニュー・イングランドの代表的な詩人で、知らぬまに春が世界に來ることをうたう ‘Spring comes on the World’ (# 1042) や、春になって一変してしまう自然の風景をうつす ‘An altered look about the hills’ (# 140) などたのしい詩がある。だが同じ女流詩人でも Edna St. Vincent Millay の ‘Spring’ という詩には、諷刺のほろにがさがまざっている。

ニュー・オールリンズの春

大橋 健三郎

「フランシアーナ州では、春はほとんど秋のインディアン・サマーの中から芽ばえてくるといってもいい。それはあたかも、舞台でからだを硬直させて死にかかっている役者が最後につぶしてしまわぬうちに、もうほかの役者たちがカーテンの前にあらわれて拍手を受けるという、へまな幕切れに似ている。ここでは、氷が張ると同時に植物の枝に花が咲き、葉が芽ばえてくるといった現象が、絶えず繰り返されているのである」

これは、ウィリアム・フォークナー (William Faulkner) の小説『パイロン』(Pylon, 1935) の中に出てくる言葉だが、ここで「フランシアーナ州」という仮名で呼ばれているルイジアーナ州の春とは、まさにこのフォークナーの言葉通りであって、日本の季節に慣れていた私などを大いに面くらわせたものだった。といっても、私がルイジアーナ州のエキゾチックな町ニュー・オールリンズで 10 カ月ばかりを過したのは、もう 17,8 年も前のことで、記憶も早や薄れがちなのだが、それでも今かつての日記や写真帖を取りだしてみると、この「へまな幕切れ」のような亜熱帯の春がまざまざとよみがえてきて、ふと郷愁のようなものを誘いさえるのである。

郷愁といえば、しかし、私はその頃鋭い日本への郷愁にとりつかれていて、いつもこのルイジアーナの季節と日本の季節を比較しては、不思議な愛憎のアンビヴァレンスにさいなまれたものだった。私は京都市生まれで、かの地の四季の鮮かなるをひそかに愛し、この東京にいてさえ、季節感の妙にとりめな^いのを憎むことがあるが、あのルイジアーナ州では、フォークナーの鮮かな直喩通りのへまな季節に、まづいらだたざるを

えなかった。秋から春が芽ばえるということは、冬がないことを意味すると同時に、秋も春もないことを意味しはしないか。いや、すべてが夏のニュアンスにすぎないということになりはすまいか。そう考えるとまことに憤らしく、私はこの地の自然にさからうように、不在の季節を求めて、ニュー・オールリンズ市の内外を彷徨ったものだったのである。

今から考えると、まことに滑稽なことである。だが、この滑稽さが逆に私の心にルイジアナ州の季節の微妙なニュアンスを 泌みこませて、18年も後の今の私に 郷愁を誘うのであるにちがいない。——私は今まざまざと思ひだす。典型的なニュー・オールリンズの3月の晴れた日。3月といっても、日本の季節感からいえば、初夏を思わせ、戸外に出ると、さんさんとふる日光がまばゆいばかり、街路樹の緑の葉がひらめき、きらめくうちに、まるで光のかたに誘われるような気がしてくる。微風がたえず吹いて、空は青いが、何か眼に見えない水気を含んだ微粒子のようなものが空一面に浮遊して、うるんだ光の波をそよがせているかのようである。この頃には既に躑躅(つむぎ)の花は落ちて、あたりは葉の緑と金色の光のたわむれ 一色といった感じだ。小鳥があちこちでさえずり、ときどきかけすの鋭い声が光の海を斜めに切る。オーデュボン公園に出ると、池の水が白く光って、スポンが眠たげに浮かび、ベンチにちらほら坐っている人の姿もまた眠っているように見える。公園は広いが、坦々とした芝生にはほとんど起伏がなく、遠くに高い棕櫚(しんろ)の樹が巨人のようにじっと動かない。池のそばの芝生に寝ころがると、気が遠くなるような気分誘われる。

ミシシッピ河の河口に位置するニュー・オールリンズは、低い、平坦な土地で、地下何フィートか掘れば水が出ると聞いた。だから、高層建築はあまりなく(現在はどうなっているだろうか)、住宅はたいてい平屋か、2階建てだった。北にはいわゆるバイユー(ミシシッピ河の沼のような入江)が多くあつて、絶えず水蒸気を放つから、空がうるんで見えるのであろう。フォークナーに『蚊』(*Mosquitoes*, 1927)という、ニュー・オールリンズを舞台にした諷刺小説があるが、ここには年中蚊がいる。ヨーロッパ風なたたずまいの住宅はたださ陰気なのに、窓には常に蚊よけの緑の網戸がはめてあって、部屋の中はうす暗い。それだけに晴れた3月の日の戸外は、まばゆいばかりに明るいのである。

私はよくミシシッピ河のほとりを彷徨った。初めは日本での河原の散歩のようなつもりで出かけたのだが、河原などというものはこのあたりにはなかった。砂はドス黒く、岸は狭く、その上、あたりにはうす黒い、不気味な恰好の大きな流木がうちあげられたままになっている。河面(がみ)ははてしないほどに広く、遙か遠い向う岸の立木の上に春の陽が沈むのを見るのは、一種凄絶でさえある。この大自然の力に打ちのめされ、しかも去りがてにしているうちに、陽は既に落ちて、思わずうしろを見あげると、もう月が輝きはじめていることも何度かあった。人っ気のない住宅街にまがりこむと、小さな教会があって、ほの白いジャスミンの花のそばに、小さなマリアの像がうっすらと月光に照

らされている。こんなときには、ふと心がおののくを感じたものだった。

そして雨。雨はよく降った。1月から既に春の驟雨(しゅうう)がやってくるのだが、しとしと降りつづいたり、思いがけず空高くにカタカタと雷鳴を轟かせたりする。むしろ暑いあとは快いが、3月でも急に冷え冷えしたりして、私を驚かせた。でも、雨はいつも私の心をなごませてくれた。郷愁を癒してくれると同時に、この南国の春をほとんど官能のように私の五体にしみわたらせてくれたのだ。

書きはじめると、次から次へと思いがよみがえって果てしが無い。マーディ・グラのことも書きたいし、ポンチャートレン湖や、プランテーションのことも書きたい。だが、おそらくこれ以上20年近く前の思い出を綴っても、有効ではないだろう。ただ自然の営みである季節だけは常に変らないだろうと信じて、貧しい、遠い思い出を上へ書きつけたのである。

日 本 の 春

山 本 健 吉

1

四季の分け方が日本と英米とでは違っている。緯度が違い温度が違う以上、これは当然のことであろう。それに、気象学、天文学などの学問上での分け方が加わり、それが逆に私どもの生活感覚の上に影響を及ぼしてくる。テレビで毎日の気象が放送されると、気象学上の取り決めはすぐ一般化して来るのである。

一般にイギリスでは2, 3, 4月、アメリカでは3, 4, 5月を春としているという。日本では古来、旧暦の1, 2, 3月を春として来た。もっと厳密に言うと、2月4日ごろの立春から、5月5日ごろの立夏の前日までが春である。これはアメリカよりもイギリスに近い。そして、二十四節気、七十二候の暦の取り決めは、もと中国の天文学でなされたもので、日本、朝鮮、ヴェトナムなど、中国文化圏ではすべて同様である。

春の立つ(到来する)日から、夏の立つ(到来する)日の前日までが、春である。その中間に、昼と夜との平分する春分の日がある。八十八夜とか二百十日とかいう言い方は、立春の日から数えて、88日目であり、210日目であるのだ。黄道上を運行する太陽の位置を現した黄経によって、二十四節気は決められているのだから、これはきわめて科学的であり、合理的でもある。

天文学上では、春分から夏至の前日までを春とし、以下これに準じている。これはおよそ、3月21日ごろから、6月20日ごろまでに当る。気象学上では、3, 4, 5の3ヵ月を春としている。日本で春らしい温暖な気候ということを標準にすれば、これも合理的と言える。私の小学校時代の国語読本には、3月、4月、5月を春という、と書いてあった。これは日本人の生活感覚にも染みこんできている。暦に立脚した立春から立夏の前

日までという考え方と、この気象学的で、同時に膚で感じる生活感覚的でもある考え方と、この二つの交錯によって、日本人の季節感は形作られるのだ。

2

立春の2月4日ごろといえば、まだ寒い盛りである。暦の上で春が来たからと言って、急に暖くなるはずもない。だが、2月にはいれば立春の日が来るのだという期待が、気持の上で支えとなって、冬をしのぎよくしてくれる。

寒いさ中に早くも春を感じ取るということは、日本人のせっかちを示すかも知れないが、それ以上に、やはり季節推移に敏感な日本人の感性を示しているのであろう。根本には、暖い季節が春なのでなく、春になったから暖くなるという考えがある。「余寒」「春寒」「冴え返る」「花冷」あるいは「春の雪」「沫雪」「忘れ霜」など、この種の春の季の詞(ことば)は沢山ある。こういう冬の名残を思わせるような現象が、交互に挿まりながら、春の季節は進行するのであって、こういう現象がなくなるときは、季節はすでに夏にはいつているのである。

季の詞とは、日本の季節現象を示す言葉というだけではない。同時にそれは、日本人の美意識によって選択された言葉でもあるのだ。「春雨」「春風」あるいは「春の暮」「行く春」などというとき、私どもはそこにある特殊な情緒を感じるようになっている。それは長い伝統によって蓄積され洗練されて来たものであって、そのような季の詞が集まってひとつの美的な秩序の世界を形作っている。季節現象を示す言葉は、当然各国に存在するが、それらがひとつの集団を作って、美的形成物を作り上げているのは、あるいは日本だけに見られることかも知れない。

その秩序の世界を考えてみると、ピラミッド形をなしている。その中心部には、古くから和歌の題として美的に磨き上げられた季語が位置している。「春雨」「春風」や「行く雁」の類である。そしてその頂点には、四季の代表的景物と見なされた春の「花」、夏の「時鳥」、秋の「月」、冬の「雪」がある。それらは国土の季節現象に客観的に照応しているものだが、それと同時に、それ自身美的形成物であり、一種のフィクション、擬制でずらある。「花」が春であり、「月」が秋であるのは、約束であって、その約束を支えているものは根本に日本人の生活があるとしても、まず日本人の美意識なのである。「鶯」を春とし、「雁」を秋とするのも、彼等を見かけるのが春または秋にかぎらない以上、それは約束だといってもよい。もちろんそれは、恣意に決められた約束ではなく、それを必然たらしめる理由がある。人は春とともに訪れる鶯の囀りや、秋とともに訪れる雁の声を、心待ちにし、従ってそれは春または秋にもっとも印象が深いのである。人は「鶯」または「雁」と聞いただけで、春または秋の季節感が胸のうちにみなぎって来るのを感じたのだ。

和歌の優美な季題のすぐ外がわには、連歌、ことに俳諧で加えられた題目がある。春の「猫の恋」、夏の「雲の峯」、秋の「鰯雲」、冬の「河豚」などといった季題である。

これらは、美意識が和歌的優美さの域をはみ出して拡充されたまでで、やはり生(き)の素材とは言えず、俳諧的な美的形成物に違いない。だが、俳句の季題は、そのような美的形成物として選択されたものであることを超えて、外界の概観を与えるために、無限に拡大して行く傾向がある。新しい季語がむやみとふえ、たとえば今日の俳句歳時記を見れば、ラグビー、メーデー、クリスマスの類がたくさんはいつている。これらはただ季語としてはいつているのであって、美意識による選択の結果ではない。だから、季語によって形成されたピラミッド形の底辺は、客観的な風土現象とそのまま重なっている広大な地帯をなしている。

日本の歳時記も、仔細に検討してみれば、決して平面的な羅列でなく、これくらいの立体性を観取できるのである。それは、日本の歳時記が、千数百年にわたって選択され、洗練され、加重されて形成された、一種の民族的創造物だからである。それは今なお形成され、変動をつづけている。それは日本人の生活とともに、文化とともに、美意識とともに変化し成長して行く。たとえばここ数年、「春一番」という言葉が、新聞や放送の面でしばしば用いられる。ある地の漁民たちの生活用語であったにもかかわらず、民俗学者がそれを採集するまでは、一般には知られなかった。かつて「東風(こし)

3

英語の季の詞の書き出された表を見ながら、私はたとえば、April shower と言えば「春時雨」という言葉を思い浮べ、May frost というと、「忘霜」「別霜」などという季語を思い浮べた。これらイギリス(あるいはアメリカ)の季節現象と、日本の季の詞と、そのまま対応するかどうかは分らない。現象に微妙な違いがあり、感じ方にさらに微細な国民性の相違があるとすれば、それを感じ分けることが、英米文学をこまやかに解読する操作ともなるわけである。

あるいは robin snow は「沫雪」(淡雪)と取っていいか。May fly は融雪期に飛ぶ俗称「雪虫」であろうか。gossamer は、近ごろある国文学者が、「かげろふ日記」や源氏物語の「かげろふ」の巻の「かげろふ」はもともとこの意味(遊糸、蜘蛛の糸)だったと言っているのを思い出させる。fill-dike は、訳語を思いつかないが、「春水四沢に満つ」というのは、同じ現象だろう、等々。

そして私にとっては、そういうことをあれこれと考えさせるだけでも、これは私にとって楽しい書物なのである。

BRITISH ISLES

0 100km



THE UNITED STATES OF AMERICA

0 1000km

ARCTIC OCEAN

Ellesmere I.

GREENLAND

ICELAND

Reykjavik

Denmark Str.

Yukon R.

Alaska

Melville I.

Parry Is.

Devon I.

Banks I.

Victoria I.

Baffin I.

Davis Str.

Hudson Str.

Southampton I.

Hudson Bay

Labrador Pen.

Newfoundland Is.

Queen Charlotte Is.

CANADA

Vancouver I.

Vancouver

Seattle

Columbia R.

Scotch F.

San Francisco

Los Angeles

San Diego

California Pen.

THE UNITED STATES OF AMERICA

Rockies

Sierra Nevada

Sierra Nevada

Sierra Nevada

Sierra Nevada

Sierra Nevada

Sierra Nevada

Sierra Nevada

Sierra Nevada

Sierra Nevada

Sierra Nevada

Sierra Nevada

Sierra Nevada

Sierra Nevada

Sierra Nevada

Sierra Nevada

Sierra Nevada

Sierra Nevada

Sierra Nevada

Sierra Nevada

Sierra Nevada

Sierra Nevada

Sierra Nevada

Sierra Nevada

Sierra Nevada

Sierra Nevada

Sierra Nevada

Sierra Nevada

Sierra Nevada

Sierra Nevada

Edmonton

Calgary

Winnipeg L.

Winnipeg

Winnipeg

Winnipeg

Winnipeg

Winnipeg

Winnipeg

Winnipeg

Winnipeg

Winnipeg

Winnipeg

Winnipeg

Winnipeg

Winnipeg

Winnipeg

Winnipeg

Winnipeg

Winnipeg

Winnipeg

Winnipeg

Winnipeg

Winnipeg

Winnipeg

Winnipeg

Winnipeg

Winnipeg

Winnipeg

Winnipeg

Winnipeg

Superior L.

Superior

Superior

Superior

Superior

Superior

Superior

Superior

Superior

Superior

Superior

Superior

Superior

Superior

Superior

Superior

Superior

Superior

Superior

Superior

Superior

Superior

Superior

Superior

Superior

Superior

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul

St. Paul